

書評 大川玲子著

『リベラルなイスラーム
—自分らしくあるための宗教講義』

米田 優作 立命館大学大学院 国際関係研究科 博士前期課程

1. はじめに

本書『リベラルなイスラーム—自分らしくあるための宗教講義』は、2021年1月に慶應義塾大学出版会から出版された、大川玲子教授（明治学院大学）の新著である。著者は、クルアーンをめぐる学問体系の中でも、特に内容の解釈に関わる啓典解釈学（タフスィール¹学）とその史的展開を専門²としてきており [cf. 大川 2013:193]、この分野への貢献を続けている [大川 2013, 2018, 2020] ほか、クルアーンの成立や章句の区分など、聖典の様態をめぐるクルアーン学に関連する成果 [大川 2004, 2009, 2018] も発表している³。

本書で紹介されるクルアーンの解釈主体の多くは、いずれもそれぞれの居住地におけるムスリム・マイノリティとしてのステータスにあり、「解釈書」を英語で記し世に問うている⁴という共通点を持っている。このことから、本書はアラビア語以外の言語で著されたタフスィール（啓典解釈）を取り上げた大川 [2013] の続編に位置付けられるものであるといえる。本書は、本質主義的なイスラーム理解⁵から距離を置き、クルアーン解釈を素材としながら、今を生きるムスリムたちのコトバや活動を彼ら彼女らが根差す社会状況と照らしながら動的に描き出すことを試みる。そして、この試みを通して、数々の非アラビア語のタフスィールの事例から、その思想的な実態を解明するだけでなく、我々の「異文化」や「他者」の眼差し方についても一石を投じることで、学問的のみならず社会的にも価値の高いものとなっている。

2. 本書の構成と概要

(1) 本書の構成

本書は紙上講義のような形式をとっており、章立ては以下の通りとなっている。いずれの講義（以下、「章」と表記）も、著者のフィールド経験によって得た情報を導入に、そこから「各章」の主題に移行し、その主題に関わるクルアーン解釈をその背景にある政治・社会状況と照らし合わせながら比較考察する、という形式がとられている。

ガイダンス

第1講 どうして聖典が重要なのか？

クルアーンの力

第2講 クルアーンは戦争を命じている？

聖典の表と裏

第3講 平和を説くムスリムって？

インドでの模索

第4講 クルアーンはテロに反対している？

ムスリム国際 NGO の挑戦

第5講 女性は離婚を言い出せない？

宗教マイノリティと男女平等

第6講 同性愛者は認められる？

英国紙ガーディアンのクルアーン解釈

最終講 リベラルなイスラーム

人類の共生する世界

序章（ガイダンス）と結論部（最終講）を除く

と6章構成になっており、内容としては、A) クルアーンについての概論とタフスィールの重要性や新しい解釈が生まれる背景について述べた第1章、B) イスラーム教に対するよくあるイメージの一つである、テロや戦争、異教徒との対立などについて、本書が主眼を置く「リベラルなイスラーム」と対極に位置づけられる主体による解釈を扱った第2章、C) 平和的・協調的な解釈や実践を行う主体を扱った第3・4章、D) ジェンダーやセクシュアリティの相違を超えた共存を目指す解釈を行う主体を扱った第5・6章、の大きく4つに分けることができよう。特にC)、D)において、本書の主題である「リベラル」なクルアーン解釈を行う主体の営為が取り上げられている。

(2) 各章の概要

序章にあたる「ガイダンス」は、講義などにおける「シラバス」に該当する内容となっており、本書の目的や意図、および全体像の概要が確認される。「イスラームの聖典クルアーンの解釈がどのようにリベラルなものになってきているのかを明らかにし、イスラーム思想の可能性を考え」(20頁)ることを目的とする本書は、イスラームを単一的に規定しようとする二つの本質主義(イスラームは好戦的で不寛容であるとし脅威であると説く議論/イスラームとはそもそもリベラルであるとする護教論)から距離を置きつつ(11-15頁)、確かに「テロや紛争、異教徒との対立、女性差別、女性へのベールの強制、女性隔離、礼拝や食事制限などの生活上の戒律の厳しさ」(13頁)といったイスラームに対する一般的なイメージや認識に見られる要素も今を生きるムスリムの一側面として存在するが、その中においても「イスラームをリベラルなものとして解釈し、行動しようとする動きがある」

ことを、彼ら彼女らのクルアーン解釈を手がかりに提示しようとしている。

また、この目的を遂行するにあたり、本書のタイトルでもある「リベラルなイスラーム」という分析概念について、「現実側をクルアーンの文言に合わせる(7世紀のアラビア半島に現れたクルアーンの文言を現代に再現させようとする)」イスラーム主義者と対比させながら定義が試みられている。それによれば、リベラル主義者(リベラルな思想潮流・リベラルなイスラーム)は、ムスリムとしてのアイデンティティを維持しつつ(神の言葉であるクルアーンの内容を否定することはせず)、クルアーンの文言の中で現実と乖離するような文言があれば、文言を現実に合わせて解釈しなおす主体であるとされる(21頁)。

第1章ではまず、ムスリムたちが解釈を行う対象のクルアーンという書物そのものについて理解を深めるため、クルアーンについての概説、とりわけ啓示の契機(下された啓示の内容の特徴、および啓示が下された当時の文脈)についての概論が展開され、「クルアーンは歴史的な文脈を如実に反映したものである」(32頁)ことが確認される⁶。こうした認識がある一方で、現実を目を移すと、クルアーンをどう読むか、理解するのかということをめぐる、それを神の言葉として絶対化して字義通りに理解しようとするのか、それとも啓示が下された際の歴史的・社会的背景を考慮し、そこに含まれる普遍的なメッセージを引き出そうとするのか、という2つの認識や理解の仕方があり、それによって解釈にも差異が生じているとされる(43頁)。この両者の緊張関係の中で、新しい解釈(すなわち本書がいう「リベラル」な解釈)が生まれる背景として、ムスリムがマイノリティとなるような環境が作用していることが、米国のシンクタンクであるピュー・リサーチセンターの世論調査の

結果を援用して述べられる（44頁）。マイノリティとしてのムスリムたちは、現実社会を生きる上で直面する諸課題に対して、イスラームの伝統を墨守するか西洋的価値観に従属するかという方法ではなく、ムスリムとしてのアイデンティティを保ったまま、すなわちクルアーン的重要性を否定せずにそれを新たに解釈し直すことによって新たな道筋を探ろうとしており、このような動きが新しい解釈を生み出すことにつながっているとされる（56頁）。

第2章では、本書の主題である「リベラル」なクルアーン解釈を行う主体とは対極に位置付けられる、「一般的」なイスラームに対するイメージに近い——すなわち好戦的な——クルアーンを読み方をする主体の解釈が取り上げられる。具体的には、イスラーム主義者によるクルアーン解釈について、いわゆる過激派のIS（イスラーム国）の機関紙『ルーミーヤ（Rumiyah）』における解釈と、在米のイスラーム主義系思想家・活動家であるムハンマド・アースイー（以下、アースイー）のタフスィール『上昇のクルアーン（The Ascendant Qur'an: Realigning Man to the Divine Power Culture）』における解釈が検討される。

まず、本章ではイスラームは好戦的であるといった本質主義的な理解から脱却するために、クルアーンには好戦的な句があることを確認した上で、史的事実や近年の欧米の人文社会科学者らの成果を検討しながら、「諸宗教や諸聖典が常に平和を説いてきたわけではなく」「クルアーンのみが好戦的な内容を含んでいるわけでない」ということが説かれる（61-65, 67-75頁）。したがって、聖典の内容と実際の戦闘や暴力には直接的な関係がなく、外部の社会状況が原因で紛争が発生した際に、聖典の好戦的な文言が暴力行為の正当性の根拠として都合よく利用される、としている（66頁）。この顕著な例として取り

上げられるのがISのクルアーン解釈である。『ルーミーヤ』に見られる解釈からは、彼らはクルアーンやハディース、先行するムファッシル（クルアーン解釈者）⁷の議論を引用しているものの、クルアーンの引用については2章（雌牛章）や9章（悔悟章）からの引用が多く、クルアーンが持つ二面性（72-76頁）のうち、戦いを鼓舞するような攻撃的・暴力的な句を好んで引用している、ということが明らかにされる（87頁）。

一方で、本書で「リベラル」の対極に位置付けられる「イスラーム主義者」のクルアーン解釈も一枚岩ではないということが、ISと比較して検討されるアースイーの『上昇のクルアーン』に見られる解釈、とりわけ2章（雌牛章）217節の「フィットナ」概念の解釈や「ジハード」概念を比較することで明らかにされている。この比較検討を通して、クルアーンを字句通りに読もうとする主体の間でも、暴力行為を正当化するためにそれを引用するのか、それともアースイーのように現代の枠組みの中でクルアーンの字句の意味を追求し、クルアーンの記述から現代的な意味を汲み取ることによって現実課題の解決のための方針を得ようとしている（91頁）のか、という読み方の差異が見られることが、確認される。

第3章では、第2章で取り上げられた戦闘的なクルアーン解釈とは対極にある、平和的・協調的な解釈が取り上げられ、その例として、ワヒドゥッディー・ハーン（以下、ハーン）のクルアーン翻訳書である『クルアーン—翻訳・注釈・アラビア語対訳（The Quran, English Translation, Commentary and Parallel Arabic Text）』に見られる平和的なクルアーン理解のあり方が紹介される。新しい解釈が生まれる背景に、ムスリムがマイノリティとなるような環境による作用があることは既に触れられていた（44頁）が、ハーンもその顕著な例であるといえよう。ヒ

ンドゥー教徒がマジョリティであるインドで、マイノリティであるムスリムがいかに生きていくべきか、という「他者」との共存のあり方を考え、行動してきたハーンは、ヒンドゥー教徒とムスリムが「1つのインド」を作る世俗的な政治を目指したりベラル知識人の系譜に位置付けられ（106頁）、彼の解釈からは宗教的対立を平和的に非暴力でもって解決するための試みを窺い知ることができる。ハーンのクルアーン解釈における主要なテーマとして、①クルアーンを他宗教の聖典を引用することで相対化し、異なる宗教間での共通性を明らかにしようとする事、②人の内的自己を覚醒させること、③平和的に生きる術を説くこと、の3つが挙げられ（112頁）、実際にいくつかの章句の解釈や訳出の仕方からは、これらの意図が如実に看取される。また、2章のイスラーム主義者による解釈との差異についても、ハーンの「ジハード」や「フィトナ」概念の解釈や、関連する章句の訳し方と、イスラーム主義者の解釈とを比較することで明らかにされる。クルアーンの文言の意味を字句通りに読むのではなく比喩的に読むことによって、啓示が下された条件における意味合いに限定して理解するのではなく、そこから現代においても適用可能な普遍的理念を引き出そうとしている点に、ハーンの解釈の特徴がある。

第4章では、平和、反暴力を説くターヒル・カードリー（以下、カードリー）のファトワー書『テロリズムと自爆攻撃に関するファトワー（Fatwa on Terrorism and Suicide Bombings）』に見られるクルアーン解釈や、その解釈・思想に基づいた教育実践に取り組む国際ムスリム NGO ミンハジュ・ウル＝クルアーン（以下、ミンハジュ）の活動（反テロ教育プログラム）が紹介される。パキスタン出身でカナダ在住のカードリーはこのファトワー書を、「少数のムスリムたちがジハードの名の下にテロをイスラームと結びつけ

ようとして」いることに対し「自爆攻撃やテロをムスリムの行為として否定する」ために発出・執筆したとされ（148-149頁）、内容としては、クルアーンやハディース、古典期や現代の法学者や神学者などの著作を網羅的に参照しながら、イスラームは平和の宗教だと定義し、その上で現代のテロリストをイスラーム誕生時から存在した反イスラーム的集団の「ハワリジュ派」と同一視して批判・否定するものとなっている（152, 154-162頁）。

ミンハジュの反テロ教育に用いられるカリキュラム本3冊（『平和と反テロリズムに関する若者と学生のためのイスラーム的カリキュラム』、『平和と反テロリズムに関する宗教指導者とイマーム、教師のためのイスラーム的カリキュラム』、『平和と反テロリズムに関するイスラーム的カリキュラム—追加重要文献』の3冊）は、このカードリーのファトワー書を中心として、彼の他の著作、講演、講義に基づいて作成されたものであり、その特徴としては、古典期のイスラーム学文献を多く引用するなど本格的なイスラーム学の教養や議論を基礎としながらも、それを現代の若者のために分かりやすく伝えようとするものである（152-153頁）。このカリキュラム本が刊行された2015年6～7月という時期は、ちょうどISが「カリフ制国家樹立」を宣言し実際に欧州にも影響を及ぼすようになっていた時期にあたり、著者がミンハジュのロンドン支部を対象に行ったフィールド調査を通じて収集した資料やインフォーマントの語りの分析からは、過激派が提示するクルアーンの意味理解に盲従するのではなく、それに対抗するために自ら思考する「知性」を作り出そうとするミンハジュの試みが明らかにされている（163-170頁）。

第5章と第6章では「男性の優位性をゆるがす新しいジェンダーやセクシュアリティのあり方を認めようとするクルアーン解釈」（179頁）が紹介される。

第5章では婚姻をめぐる女性の社会的地位に関して、ボハラ派⁸出身のインド人ムスリムであるアスガル・アリー・エンジニア（以下、エンジニア）による離婚と多妻婚をめぐるクルアーン解釈が、第6章では同性愛に対する認識に関して、パキスタンに出自を持ちイギリスで文化評論家として活躍するズィアウッディン・サルダール（以下、サルダール）による同性愛を論点に含んだクルアーン解釈が検討される。

エンジニアのクルアーン解釈書『クルアーン、女性、そして近代的社会 (The Qur'an, Women and Modern Society)』は、当時（1980年代後半）のインド社会で議論を呼んでいた「トリプル・タラーク」の問題⁹について、これまでの伝統墨守的なイスラーム法の権威を相対化し、クルアーンが女性への差別を認めていないことを解釈によって提示、現実問題の改革を提唱するものとなっている（186頁）。エンジニアのクルアーン解釈の特徴としては、クルアーンには①精神・規範（理想）と②字句・文脈（経験）の2つの側面があるという前提に立った上で、時代や場所によって変えることができない普遍的な理念（前者）と字句通りの意味（後者）を分離、抽出した前者をその時々時代に適応させることによって各時代の信徒たちの状況に応じた解釈を得ようとする点が挙げられる（191頁）。実際に、婚姻についての典拠とされる2章（雌牛章）228-230節の解釈の際には、クルアーンの句となって現れたものをそのままの意で受け取るのではなく、その啓示が下った際の状況を踏まえながら啓示が含む持つ時空を超えた規範的理想を引き出すことによって、近代的な価値（男女の平等な権利の容認）とイスラームは全く矛盾していない、ということを示そうとしている（192-198頁）。

サルダールのクルアーン解釈書『クルアーンを読む—イスラームの聖なるテキストの現代的関係

性 (Reading the Qur'an: The Contemporary Relevance of the Sacred Text of Islam)』は、「7.7事件」後に非ムスリムからムスリムの聖典を知りたいという要求が高まったことを受け、2008年に英国紙ガーディアンへのブログとして執筆されたものである（205頁）。彼もまた、エンジニアと同様に伝統的なクルアーン解釈のあり方を批判しており、それは、3つの伝統（①アトミズム¹⁰、②ウラマーの権威、③アラビア語の絶対性¹¹）を否定し、時代の要請に応じてクルアーンテキストを総体的に見ながら、それが本質的に意味することを人間の理性を用いた思考を駆使して解釈しようとする特徴として現れているという（211-217頁）。このことは実際に、本章で紹介される結婚や離婚、多妻婚、同性愛などをめぐる解釈の事例において、従来アトミズム的に解釈が与えられてきた、多様なトピックを含む一連の章句（2章（雌牛章）219-242節）について、共通項と考えられる概念を導入することでそれらを接合し、通底する意図を探ろうとする試み（220頁）や、各句を個々に検討すれば一見矛盾するような内容であっても、そこに通底する主張を汲み上げてクルアーン全体の統合性を示そうとする試み（222-224頁）として、示されている。

前章のエンジニアの解釈と本章のサルダールの解釈の比較からは、同じ新しいジェンダーやセクシュアリティを認めようとする共通点を有しつつも、前者がクルアーンテキストを解釈する際に普遍的な理念と文脈とを分離し、クルアーンの普遍的な理念を西洋近代の価値観と合致させようとしたのに対し、後者はある特定の価値観や立場に与したり解釈を確定させたりせずに、論争や議論を通して時代に応じたクルアーン解釈を提示しようとするポストモダン的な特徴を有しているという違いがあることが確認される。

結論部にあたる「最終講」ではまず、本書の主

題であった「リベラルなイスラーム」解釈を行う主体が有していた共通性について整理が行われる。彼らには居住地において宗教マイノリティであるという共通点があった。そこでは常にマジョリティ社会という「他者」と向き合い共生することを余儀なくされるような状況であったがゆえに、直面する諸課題に対して、それぞれが神の正義を信じつつ（クルアーンに根差しながら：ムスリムとしてのアイデンティティを保ちながら）、それに則った形でクルアーンの新しい読み方を人々の前に提示しようとしていた。この営為については、解釈者それぞれが置かれている地域の特殊性ゆえに生まれた解釈としても捉えることができるが、著者はこれを特定地域の諸課題に対する営為としてのみならず、他の地域に生きる現代のムスリムが直面する諸課題に対する営為としても広く派生しうるものとして捉えようとしている（235頁）。次に、本書の議論を通じて明らかになった「イスラームをリベラルなものとして解釈し、行動しようとする動きがある」ことを踏まえた上で、今一度、本質主義的に他者を理解しようとするに対して警鐘が鳴らされている（237-241頁）。この著者による警鐘は、イスラーム理解のあり方だけでなく、より普遍的な異文化理解のあり方についても、我々に示唆を与えるものとなっている。最後に、宗教は社会の影響を受けて常に変わりうるものであることが確認されつつ、今後のイスラーム思想の状況について展望されている。

3. 総評

(1) 本書の意義

本書は第1に、これまでの議論からも明らかのように、非アラビア語のタフスィール、とりわけ英語で書かれたタフスィールを手掛かりに、そこに反映された思想実態を分析したものとして、タフスィー

ル研究の最前線としての高い価値がある。日本におけるタフスィール研究自体は、クルアーンそのものに関する研究やハディース研究と比べて蓄積が少ないことはこれまでも指摘されてきており〔小杉 1994:85; 2008:67〕、本書はまずもってこの分野の研究を深化させる上で重要な貢献を為しうるものであると考えられる。

第2に、本書で紹介されるクルアーンの章句が一つひとつ文脈の中に位置付けて説明されていることによって、読者はその章句の訳語を比較検討するだけでもイスラーム思想のダイナミズムを感じ取ることができるようになっている。クルアーンの章句はそれ単体で見ると抽象的で意味がよくわからないものが多いが、本書で引用される様々な解釈主体によって巧みに訳し分け解釈を与えられたクルアーンの章句それら一つひとつは、背景にある解釈主体の生い立ちや思想遍歴、時代や状況に応じて解釈主体が反映してきた思想的な実相と合わせて分析されている。

第3に、「ムスリム」や「イスラーム」となると、一見すると自分たち日本人の側から見て「異質なもの」や「他者」として認識されがちであるが、それらに対して「共通性を見出そうとする本書（5頁）は我々のイスラーム理解のあり方、異文化理解のあり方に対しても一石を投じるものである。この「他者」の捉え方をめぐる姿勢は、著者自身も引用しているインド出身の経済学者であるアマルティア・センのムスリムに関する主張（14-15頁）や、フランス在住のレバノン系移民でありフランス語作家であるアミン・マアルーフが展開するアイデンティティ論（240-241頁）と通底するものがある。特に、マアルーフは、アイデンティティを単一のものと認識せず多数の帰属から構成されるものとして認識することによって、これまで相互排他

的であるとみなされてきた「我々」と「彼ら」というアイデンティティの中に、部分的に「他者」を見出そうとする、すなわち「我々」の中に部分的に「彼ら」と共通する要素を見出そうとしており、それによって本質的に相容れないとされてきた「自己／他者、我々／彼ら」という区分の止揚を試みてきた [マアールフ 2019:16-57]。

本書は、この「共通性を見出」すということを2つの側面から行っていたと思われる。第1に、今を生きるムスリムたち自身が、各々が神の正義を信じてクルアーンに根差しながらも、そこに他宗教や近代的価値観との共通性を見出そうとしていた側面を、本書はタフスィールを手掛かりに描き出したこと、第2に、第1であげた事柄を通して、一般的に非自由で不寛容であり「我々」とは相容れない「他者」というレッテルを貼られがちであるイスラームにも、リベラルな側面——他者との共生や反テロリズムの推進、新しいジェンダーやセクシャリティのあり方を認めていこうとする動き——があり、そこには「我々」とも共通性があるということを示したこと、である。

このように本書は、非アラビア語のタフスィールを手がかりに、そこに反映されたイスラーム思想のダイナミズムを窺い知ることができるものとして、また我々の「異文化」理解のあり方を問い直すきっかけや切り口を与える意義を持つ書籍であることを認めたい。著者は本書の中で、「リベラルなイスラーム」を「イスラーム主義」的な思想潮流と対比させながら分析を行っていたが、その副作用として、イスラーム主義自体も時代や状況に応じて多様性と変化を見せてきたという側面が、読者の目に映りにくくはなっていないだろうか。もちろん、この「リ

ベラルなイスラーム」と「イスラーム主義」という二分の仕方については分かりやすくするための便宜的なものであると著者自身も述べており (21頁)、このことは想定内であろうが、「イスラーム主義」の中にもリベラルな部分がある点について著者はどのように捉えているのか伺ってみたいと思った。

(2) 結びにかえて

ここまで、著者のこれまでの研究の中に本書を位置付けた上で具体的な内容を紹介し、タフスィール研究における本書の意義や評者の関心に沿った本書の意義と課題について述べてきた。本書は総じて、イスラーム思想のダイナミズムを知るためにも、また我々のイスラームへの眼差し方、異文化理解の仕方について示唆を与えてくれるものとしても、ぜひ幅広い読者に読まれて欲しい一冊であるといえよう。もちろん上で挙げた課題についてはないものねだりに過ぎないことは自覚しており、それによって本書の価値は些かも減ずることはないと考えている。

歴史的に見れば、イスラーム解釈は「最初に解釈書の内容を記すのは解釈学者であるが、最終的には一般信徒が受け入れた解釈が生き残り、広がって」きており、またタフスィール学の一つの特徴として、「時の流れの判定を経て生き残った解釈書が、並行的・重層的に用いられて」きたことが挙げられる [小杉 2003:611]。本書で紹介された解釈が信徒たちにどのように読まれ、受容、消費されるのか、その動向からも目が離せない。

脚注

1 クルアーン解釈を示す用語として、「タフスィール」と「タアウィール」という近似した二つの概念があり、両概念の異同については学者間の見解が

分けられるとされる（〔下村 2018b; 松山 2018〕などが詳しい）。しかしながら、一般的にはクルアーン
の注釈書は「タフスィール」と包括的に呼ばれている〔小杉 1994:86-88; 松山 2018:290〕ことから、
本稿でも啓典の解釈やそれを行った注釈書のことを「タフスィール」と呼ぶ。

2 近年では人類学的手法（フィールド調査）も併
用した成果も刊行されており、例えば、マイノリティ
ムスリムのアイデンティティについて取り上げた〔大
川 2017〕や、本書の第4章における国際ムスリム
NGO への参与観察・インタビュー調査などが挙げ
られよう。このことから、本書の著者の専門領域は
単なる文献学的調査に限定されないように思われる。

3 このほかにも、クルアーン写本の美しさを紹介す
るものとして〔大川 2005〕が刊行されている。

4 ただし、第3講で取り上げられるハーンの『クル
アーン—翻訳・注釈・アラビア語対訳』は最初にウ
ルドゥー語として刊行されたのちに英語に訳されて
いるほか、第4講で取り上げられるカードリーの『テ
ロリズムと自爆攻撃に関するファトワー』も最初にウ
ルドゥー語、次いで英語で刊行されている。

5 物事の一側面（ここではイスラームをめぐる暴
力や不寛容といったイメージや、その逆の「イスラ
ームとは平和な宗教である」という護教論的な言説を
指す）にのみ過度に着目し、あたかもそれが物事
の全体であるかのように語るようなイスラーム理解の
され方、という意味で用いる。

6 啓示の契機に関して、その意味が（啓示が下っ
た）特定の個人や事件、出来事、状況に対するも
のとして限定的に解釈がなされるのか、それとも一
般性を持ったものとして解釈がなされるか、という
ことについては、「表現の一般性と啓示の特殊性」
としてイスラーム法源学やクルアーン学における議
論の対象となっている（〔下村 2018a〕が詳しい）。

本書でも、クルアーンを字義通りに読むのか（神の
言葉として絶対化するか）、それとも歴史的文脈の
中で捉えようとするのか（時代背景などを考慮して
相対化するか）という論争自体が社会に緊張をもた
らすものであることが確認され（43-44 頁）、著者
の区分に従うと前者は本書における「イスラーム主
義」的なクルアーン解釈、後者は「リベラル主義」
的なクルアーン解釈として位置付けられているよう
に思われる。

7 古典期のクルアーン解釈者、イブン・カスィー
ルの解釈が引用されているとする（85-86 頁）。

8 ボホラ派（ポーホラー派）とは、シーア派の分
派であるイスマイル派のさらに分派であるとされる
（182 頁）。

9 トリプル・タラークとは、男性からの一方的な離
婚通告を指す。イスラーム法では女性から離婚を申
し出ることが極めて制限されている上、夫が一方的
に「タラーク（離婚）」と三回続けて告げると離婚
が成立する、という規定が認められている、とされる
（187 頁）。

10 クルアーンの句を細かく区切りながら扱い、
個々に解釈をあてていくという伝統的に行われてき
た解釈方法（アトミズム）を批判、他の句との相関
関係を重視し、クルアーン全体から句の意味を考察
する解釈を肯定した（212 頁）。

11 近代以前のクルアーン解釈が、正統な権威を
持つ宗教教育（アラビア語学やイスラーム学）を受
けたウラマーにのみ支配的なものであったことを批
判し、個人が直接クルアーンに関与することは認め
られていると説いた（214-215 頁）。

参考・引用文献

大川玲子 2004『聖典「クルアーン」の思想:イスラ
ームの世界観』講談社現代新書。

_____ 2005『図説 コーランの世界：写本の歴史と美の全て』河出書房新社．

_____ 2009『イスラームにおける運命と啓示—クルアーン解釈書に見られる「天の書」概念をめぐって』晃洋書房．

_____ 2013『イスラーム化する世界：グローバル化時代の宗教』平凡社新書．

_____ 2017『チャムパ王国とイスラーム——カンボジアにおける離散民のアイデンティティ——』平凡社．

_____ 2018『クルアーン——神の言葉を誰が聞くのか』<世界を読み解く一冊の本>慶應義塾大学出版会．

_____ 2020「世界のクルアーン解釈と日本」日本のイスラームとクルアーン編集委員会編『日本のイスラームとクルアーン：現状と展望』晃洋書房，pp57-90.

小杉泰 1994「イスラームにおける啓典解釈学の分類区分—タフスィール研究序説—」『東洋学報』第76巻1/2号，東洋文庫，pp.85-111.

_____ 2003「タフスィール学」大塚ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店，p.611.

_____ 2008「クルアーン」小杉泰・林佳世子・東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会，pp.62-71.

_____ 2009『クルアーン：語りかけるイスラーム（書物誕生：あたらしい古典入門）』岩波書店．

下村佳州紀 2018a「“啓示”が下された契機とその役割とは」松山洋平編『クルアーン入門』作品社，pp.197-221.

_____ 2018b「クルアーンを解釈することとは」松山編『クルアーン入門』作品社，pp.249-285.

マアルーフ，アミン．（小野正嗣訳）2019『アイデンティティが人を殺す』ちくま学芸文庫．

松山洋平 2018「スンナ派のタフスィール」松山洋平編『クルアーン入門』作品社，pp.289-316.

【著者プロフィール】

米田優作（よねだ・ゆうさく）

修士学生

所属：立命館大学大学院 国際関係研究科 博士前期課程

専門：現代中東政治、近現代イスラーム思想

主な業績：「現代サラフィー主義研究の課題と展望」『イスラーム世界研究』第14巻、2021年3月。“Islamism Studies in Japan: Its Trajectory and Key Features”, *Asia-Japan Research Academic Bulletin* Vol.2、2021年（近刊）など。

